

赤トトギス
昭和二十九年六月二十一日
平成二十二年六月二十一日
（日本文学）第一卷第十三号第六卷

赤トトギス

六月号



俳句随想 〔三百三十六〕

汀子

この二月七日、山田弘子さんが亡くなられた。哀惜の念に堪えないのと同時に無念でならない。弘子さんは七十五歳、まさに脂の乗り切った、ホトトギスイや日本を代表する俳句作家の一人であった。そうであるからこそ私はホトトギスの主宰として弘子さんの評価を含む真摯な「送る言葉」を捧げようと思う。

弘子さんの俳句は天才的な鋭い感受性と優しく巧みな表現力を兼ね備えていたが、それでも常に新しい冒険に挑戦し続けていた。

曾て弘子さんは「円虹」独自の歳時記を出そうとしたことがある。その内容が『ホトトギス新歳時記』の季題の中、古くなつたものを抜き、新季題を加え、作品は「円虹」の人達の作品に置き換える計画であると分つた時、私は弘子さんと呼んで、ホトトギスを離脱するように求めた。その理由は以前にこの欄で書いているので省略する。弘子さんはハツと気がつかれ、この計画を中止して下さつたのでホトトギスの離脱事件にはならなかった。

俳句会にあつても弘子さんは常に新しい冒険に挑戦し続けた。そのような句は運座の場にあつても私には弘子さんの句とすぐに分つた。そんな時、私は特に厳しく選をしたつもりであるが、結果としては多くの弘子さんの名句の数々が生まれたのである。

〔三百三十七〕へ続く

句日記 汀子

平成二十一年六月一日 ロイヤル俳壇

十葉のたちまち所在知られけり
どか閉め忘れし莊の火取虫
やうやくに家居の心火取虫
朝毎に火蛾の命の果を掃く
返信を書きそびれぬし火取虫
六月四日 祝「初時雨」二百号
心寄せ合へば新涼おのづから
六月六日 芦屋ホトギス会
水音のあれば河鹿の瀬と思ふ
柿の花こぼるるままに咲く山家
青芝といへる狭庭の一部分
古藤椅子加へて客の人数に
六月七日 関西野分会
子子に水の明暗生れけり
旅先に忘れてならぬ夏帽子
この後の計画胸に梅雨近し
歳月の語る茂りの庭となる
六月七日 下萌句会
かの人も侍りしと聞く業平忌
男 心 女 心 や 業 平 忌
青鷺の来しは狭庭よ語りたく
六月九日 大阪倶楽部
鈴蘭の蝦夷地は遠し計報来し
分け入りて蜜柑の花の香の中に
又視線外れてしまふ雨蛙
取材場所ややく決まる夏木立
梅雨の月赤し大地を離れたる

六月九日 綿業倶楽部

山莊の灯蛾に先を越されけり
明らかに今日が梅雨入りとなりしこと
火取虫にも迎へられをりし莊
決まりゆく旅の計画梅雨に入る
六月十一日 清交社
計画は秘めごとなりし梅雨に入る
蜘蛛の囀の所在を雨の明かしけり
囲の大きかりしに蜘蛛の小ささよ
夏帽子脱げば家居の顔となる
考へのまとまりさうに梅雨の稿
六月十二日 工業倶楽部
さつきまでつてをり蝸牛消えてをり
朝の雨上つてをりぬ蝸牛
上京の目覚まし止めぬ明易し
著我咲けば庭の中心移りけり
はかりごとには夢のあり明易し
六月十三日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会
松 蟬 を 聞き 追 悼 の 思 ひ 又
卯の花の山路も通ひ馴れしもの
歲月といふ涼風のやうなもの
六月十四日 北近畿ホトギス俳句大会
蛩見の誘ひの電話かも知れず
浮かびくる温顔ありて句碑涼し
若楓明りの句碑と申すべし
六月十五日 有恒倶楽部
存在の紛れをりし実梅かな
何もなき如くにありて蟻地獄
山と海近き町並青嵐
一仕事終へてしづまる蟻地獄
火を取りに来て戻り路のなき灯蛾
六月十六日 無名会
今年又迷はず旅路風薫る

六月十七日 夏潮句会

薔薇抱いて謝辞とつと述べにけり
薔薇の刺ためし花東出来る
星を見るため家居や風薫る
梅雨に入りたるより晴のつゞく旅
薫風に托す便りでありにけり
薔薇の門くぐれば人の気配ふと
六月十七日 夏潮句会
計画は着々々水の音涼し
いつの間に蠅虎のゐる書齋
蚊を退治する新兵器贈られし
蛩の育つ手順に従へり
川 蟻 を 入 れ 蛩 へ 夢 つ な ぐ
六月二十日 句会と講演の会
鈴蘭の香の一点が一面に
庭に摘み来しと鈴蘭二百本
質問の始まるまでの涼しさよ
六月二十一日 野分会
夏至といふ日に雨といふ夕べかな
子子としての命もあるべかり
鏝広の脱げば別人夏帽子
六月二十五日 きららぎ会
梅雨といふことを忘れてある旅路
約束の一つ果たせし梅雨の晴
梅雨曇予報は晴と聞いて来し
ことわれぬ原稿依頼火取虫
梅雨憂しとせざる旅路となりしこと
六月二十六日 時雨会
空仰ぎ秋思の星を数へけり
黄落の大地途切れし曲り角
秘境ともいへるここには山椒魚
初鴨とおろそかならぬ数へ日に
凍滝のなき水音を聴いてをり

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年六月一日 カトリック新聞選者吟

グレゴリオ才聖歌薄暑の聖堂に

六月一日 はせを句会

明易や虚子の詠みしはこの辺り

摩天楼より黒南風の降りて来し

西日てふタワーを歪めたる角度

六月三日 一水会

五月闇虚子のあしあと迎る旅

鯖釣の磯鋭角でありにけり

えごの花武蔵野今昔物語

六月三日 百夜句会

黒南風や空へ伸びゆくビルの黙

短夜といふ君とゐる不思議かな

七変化君の涙に濡るるとき

四聴ほど君の心を弄ぶ

六月四日 蕉心会

夏館集ひ芭蕉の心はも

三変化ほどの四繭でありにけり
ビルの風に夏蝶放り上げられし
夏蝶の三つ巴てふ荒さかな

六月十日 土筆会

黒南風を惑はせてゐるビルの先

馬鈴薯の花に大地の緩び初む

馬鈴薯の花風に揺れ風に萎え

菅蒲田の空気が紛れでありにけり

六月十二日 六甲会

疲鶴に水の凹んでゆきにけり

鶴鴛に空狭まつてゆきにけり

鶴飼果て水の存問ありにけり

その中の荒鶴に火の粉てふ修羅場

百本の薔薇では君は落とせな

薔薇香るより二楽章始まれり

茂とは館の桂であればこそ

六月十二日 虚子記念文学館投句

入梅に色深めゆく館の庭

六月十三日 北近畿ホトギス俳句大会

万緑裡気が付けば百四十キ口

曇天を近付けて挽ぐ杏子かな
芦屋浜シーサイドタウンの夜釣
夜釣人間が包んでゆきにけり

六月十日 ホトギス社句会

思ひ出は永遠鈴蘭とクリンゲ氏

六月十三日 若水句会

棲むへの親分子分総出かな

溝俊へ大地神代の香りして

曇天を糺し矢車菊開く

六月十四日 目黒学園句会

河骨や二級河川の華やげり

鰻屋の煙が客を寄せてをり

鳩の子に大琵琶暮るること忘れ

巢を離れたる鳩の子にある試練

河骨の群生曲り虚子館へ

鳩の子のもう川幅を知り尽し

六月十六日 草木瓜会

緑蔭に句碑一字づつ明かしゆく

六月十六日 登高会

杏子挽ぐ手に郷愁の香を移し

PDF= 俳誌のsalon

雑詠

廣太郎 選

寒卵割り真つ新な朝であり 神戸 山田弘子
 寡黙とは沈黙ならず冬薔薇 同 同
 あらためて胸に点す灯月冴ゆる 同 山田佳乃
 水仙の紛るることのなき香り 同 同
 初夢の覚めて大人に戻りけり 同 同
 凍蝶や空地のままの十五年 同 千原叡子
 蝶凍てて過去も未来も意のままに 同 同
 梅の香にとり残されし思ひかな 同 同
 主宰誌の継承しかと梅の花 同 同
 みよし野に此の世の桜共に見し 東京 今井千鶴子
 急がるる天上界の花見むと 同 同
 春寒し人の命といふものを 同 同
 春宵の一会で永久の別れとは 芦屋 黒川悦子
 紅梅の盛りといふに旅立たれ 同 同
 何故に急ぎ逝かるる寒き春 同 同
 遺る我に大道を指す寒の月 香川 湯川 雅
 寒灯下音なく過ぎる通夜を守る 同 同
 抱き戻る遺骨に冬の灯を点す 同 同

今生の別れの朝梅真白 同 三宅久美子
 天上も梅の盛りであれかしと 同 同
 円虹を渡り巨星となり賜ふ 同 同
 冴返るとは覚悟してをれどなほ 榎原 稲岡 長
 早春の風強くとも日のひかり 同 同
 天啓のやうに梢の梅一輪 同 同
 月冴えて物音もなき山の寺 京都 安原 葉
 根付きたる証数多の冬芽かな 同 同
 水音も庭の寒さを誘ひをり 同 同
 なやらひの稽古に余念なき子かな 神戸 涌羅由美
 松明をぶんと回して鬼やらひ 同 同
 冬帽の子等前列を陣取りぬ 同 同
 千両を落つ雨粒の二両ほど 八尾 岩垣子鹿
 煮凝のへろへろ震ひある時間 同 同
 凍蝶に加勢の息となつてぬし 同 同
 よぎる赤落ちてゐる赤寒椿 龍ヶ崎 今橋眞理子
 三寒のふとゆるびたる日の報せ 同 同
 虚子のふところへと急ぐ四温かな 同 同
 冬芽には太陽吾に祈りあり 福山 竹下陶子
 寒牡丹一片の詩を彩に吐く 同 同
 浮び来しホ句を初湯に掬びけり 同 同
 立寄らで過ぎて悔無し寒桜 熱海 嶋田摩耶子
 花八手新車運転そろそろと 同 同
 忘れぬし香よ柵の花に佇つ 同 同

雑詠句評（五月号より）

中 正・むつみ・芳子

美 奇・眞理子・憲明

保 佳・とほ歩・葉

静 龍・千鶴子・廣太郎

風花にうつし世遠く父送る 龍ヶ崎 今橋眞理子

花鳥諷詠には、どんな悲しみごとにつけても、自然や遙かなるものとの一体化を通して魂を救済する力がある。苦しみ悲しみも直視しつつ受容する力を与えてくれるのである。

作者はつい最近、最愛の父を亡くされた。今は風花の一片となつてこの現世を離れていく父とひとつになつて、父と惜別をする作者である。遙か幽明相隔つても、思いはひとつ。「父送る」と詠んでもなお、父は眼前にいろのである。「うつし世遠く父送る」という美しいしらが、いかにも哀切。風花もまた、はかない人のいのちを象徴して美しく哀しい。抑制され誌的に昇華された表現であればこそ、限らない哀しみが伝わってくる一句。心より御冥福をお祈りしたい。（中正）

過日御尊父様を亡くされた作者である。最愛の肉親との別れはこれ以上もない悲しみであるが、この句からは気丈なまでの作者の気持が伝わってくる。御葬儀の日に「風花」が舞っていたのであろう。自分の気持を季題に託して平明に詠む作者の技量にただただ脱帽するばかりである。（廣太郎）

賽の飛ぶ飛ぶ飛ぶ十日戎混む 神戸 立村霜衣

賽銭が飛ぶことも十日戎が混むことも特別珍しい景色でもない。それだけならば既に言われている平凡な情景であろう。しかしここで面白いのはやはり「飛ぶ飛ぶ飛ぶ」のリフレインである。なんとリズムカルなことか。「飛ぶ飛ぶ」の二回ならば考えられるが、三回「飛ぶ」を畳みこまれると一緒に賽を投げているような気にもなる。四方八方から賽が投げられどよめきが伝わり、十日戎の混み具合が想像できる。句跨りがまた面白い。アップテンポのリズムにそれも一役買っているのではないだろうか。口に出して読むと楽しい俳句である。「TOBU」の「U」の韻を三度繋ぎ、最後に「KOMU」の「U」の韻で終わっているとこの歯切れ良さがいい。（むつみ）

筆者は西宮の戎神社に「十日戎」の時に行った事があるが、いやはやもの凄い人であつたのを思い出す。本当に身動きがとれないのである。賽銭箱に辿り着けなかつた記憶もあるが、その人の多さをダイナミックに描いている。賽銭が「飛ぶ」という言葉を三回も使つたことは、正に天晴れである。（廣太郎）

天地有情

寒灯を消し活字より解かれけり
 忌籠りの人に四温の続けかし
 絵踏無き世の悲しみといふも又
 木の実植う一つは君の未来へと
 去年の鴨今年の水の上にかな
 晩年の父なつかしや浮寝鴨
 早春のこの小城下を誇りとし
 春未だはん女も偲び山居の夜
 まだつづく仮設暮しや露寒し
 浜の宿朝より秋刀魚焼いてをり
 冴ゆる夜の小さき星となられしか
 何もかも冴ゆる思ひの夜更けゆく
 眉山雪城山くろく眠る街
 しびれくる足かばひきし年暮るる
 思ひ出に雛を飾りてみたる夜は
 初雷にもぞと動きぬ腹の虫
 うららかな言葉に乗せてもらひけり
 体温を消されてしまふ神の亘て

神戸 山田弘子
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 たつの 浅井青陽子
 同
 京都 安原 葉
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 徳島 上崎暮潮
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 福山 竹下陶子
 同

心子選

早春の旅立ち虚子の懐へ
 さよならは愛車のホーン春の宵
 藪蘭の穂のむらさきに夜半恋ふ
 俳諧に花の生涯惜しみなく
 煖炉焚き暮しの戻り来し山廬
 星冴ゆる窓開け放ち見る凶鑑
 美しき手に負けてをり歌かるた
 悴むも踏ん張る心ありにけり
 マフラーの中にうづめてゐる想ひ
 冬桜なにもなかつたやうに散り
 あるがまま生きると言うて寒の月
 退院は間近と言ふ日寒夕焼
 冬山の雑木林の麓かな
 枯木宿水道栓の立つてをり
 四季桜冬は殊更さくら色
 悪びれず枯れ切るといふこと大事
 父母をらぬ此の世に長し初暦
 賀状見る名前淋しくなつて来し

神戸 長山あや
 同
 姫路 桑田永子
 同
 金沢 藤浦昭代
 同
 東京 河野美奇
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 青森 柴崎秋峰
 同
 明石 中杉隆世
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 熱海 嶋田一步
 同

天地有情句評

汀子

城下町龍野をこよなく愛し迎えた早春。

まだつづく仮設暮しや露寒し 京都 安原 葉

災害の後の酷しい暮しの現実。

寒灯を消し活字より解かれけり 神戸 山田弘子

冴ゆる夜の小さき星となられしか 東京 今井千鶴子

今は亡き弘子さんの恪勤の在りし日の姿。

追悼。

絵踏無き世の悲しみといふも又 東京 稲畑廣太郎

眉山雪城山くろく眠る街 徳島 上崎暮潮

さまざまな哀苦辛酸の現実。

厳寒の阿波の街。

去年の鴨今年の水の上になかな 熊本 岩岡中正

思ひ出に雛を飾りてみたる夜は 榎原 稲岡 長

北の国へ帰る日も近い鴨の今。

雛の思い出が告げるもの。

早春のこの小城下を誇りとし たつの 浅井青陽子

(以下略)